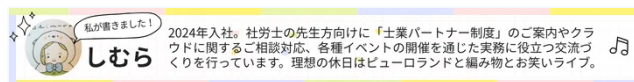




【SRショッキング #1】62歳で社労士に。 IT×法律の二刀流・小林勝哉先生



CLOUD STATION
2026年4月20日 10:53



[X\(@shimutecodesign\)](#)でも土業向け情報を発信中!
✨プロフィール画像クリックでアカウントへ✨す。

「SRショッキング！」とは

「あの先生が認める、すごい先生って誰だろう？」そんな好奇心から始まった、社労士による社労士のためのリレー対談企画です。

誰もが知るあの名番組をオマージュし、ゲストが「自分よりすごい！」と一目置く先生を推薦。オンラインでその「思考の裏側」を徹底的に深掘りします。

信頼する同業者からの「最高の紹介」を持って登場する、業界キーマンたちの本音に迫るnote連載です。



小林勝哉先生

「一人の人のために、何ができるか」 その問いを胸に、ITの世界から社労士の門を叩いた一人の「シニア」がいます。

記念すべき第1回ゲストは、ITと法律の二刀流で活躍する**小林勝哉先生**。60歳を目前に難関資格に挑んだ情熱と、最新のIT技術の裏側にある「人間のぬくもり」へのこだわりをたっぷり伺いました。

▼ 目次

5回の挑戦、62歳での合格。遅咲きだからこそ見えた景色

ITと法律を繋ぐ「ぬくもり」の研究：タンジブル・ビットとは

AI時代のセキュリティ：「守り」のフェーズが変わった

TECO Designという「チーム」で働く理由

「リーガル・プロフェッション」としての誇り

小林勝哉先生の活動・プロフィール

5回の挑戦、62歳での合格。遅咲きだからこそ見えた景色

——記念すべき第1回ゲストにお越しいただき光栄です！まずは小林先生が社労士を目指された経緯を詳しく教えてください。

小林先生：ありがとうございます。そうですね、見ての通りシニア世代からのスタートなのですが、きっかけは60歳を目前にした「キャリアの棚卸し」でした。45歳以上をシニアと定義するなら、私はまさにそのド真ん中。定年後の道を考えようとキャリア相談室に行き、「得意なことをホワイトボードに書いてみなさい」と言われたのですが……。当時は何も書けなかったんです（笑）。

——そこからどうして社労士に？

小林先生：そんな時、人生の先輩から紹介されたのが社会保険労務士という資格でした。挑戦してみたら、これが想像以上に手強い。結局、勉強に4年を費やし、5回目の受験でようやく合格しました。当時は定年後の再雇用制度の中にいたのですが、62歳の時、まさにギリギリのタイミングで滑り込んだという感じでしたね。

——5年間、心が折れそうになることはありませんでしたか？

小林先生：もちろんありました。でも、モチベーションの原点は非常にシンプルで、「一人の人に喜んでもらいたい」、これに尽きます。会社員時代、長年中間管理職としてマネジメントに携わってきました。制度を工夫し、運用を整えることで、社員の皆さんがニコッと笑顔になる。その「陰の仕事」が大好きだったんです。組織を離れても、社会の中で誰か一人のために役に立ちたい。その思いだけが、私を机に向かわせました。

ITと法律を繋ぐ「ぬくもり」の研究：タンジブル・ビットとは

——小林先生はもともと、ITエンジニアとして輝かしいキャリアをお持ちですよね。

小林先生：「コンピュータ屋さん」をずっとやってきました。特に大切にしていたのが、「人間とコンピュータのインターフェース（CHI）」という分野です。

——インターフェース、ですか？

小林先生：はい。コンピュータを操作する時、かつては難しいコマンドを打ち込む必要がありました。でもそれでは一部の人しか使えません。私が惹かれたのは、MIT（マサチューセッツ工科大学）の石井裕教授が提唱された「タンジブル（触れられる）・ビット」という概念です。

例えば、遠く離れた場所にいる家族のぬくもりを、カーテンのそよぎや光のゆらぎ、あるいは手元のデバイスに触れる感触として感じられる。デジタルな情報を、いかに人間の五感に訴える「温かな存在」として届けるか。そんな研究分野にとっても魅力を感じました。



タンジブル・ビットのイメージ

——デジタルとアナログの融合ですね。それが今の社労士業務にどう繋がっているのでしょうか。

小林先生： 法律も全く同じだと思ったんです。一見すると無機質な条文や手続きですが、その先には必ず「一人の人間」の生活があります。ITも法律も、人間がより良く生きるための「道具」に過ぎない。デジタルなITの知識と、血の通った法律の解釈。この両面から一人の人を支えることが、私のフィールドなのだと気づいたんです。

AI時代のセキュリティ：「守り」のフェーズが変わった

——現在はセキュリティ分野のコンサルティングでもご活躍ですが、今の時代、社労士にITスキルは必須だと思われますか？

小林先生： もちろん必須です。特に最近のAIの進化は凄まじい。5年前のセキュリティ対策は、今では通用しません。昔は「いかに侵入させないか」という境界線防御が主流でしたが、今は「もう侵入されることは前提。その上でどう被害を最小化し、情報を守り抜くか」という経営判断のフェーズに移っています。

——AIが攻撃の手法を学習してしまう、というお話もありましたね。

小林先生： そうなんです。攻撃側もAIを使いますから。だからこそ、我々社労士もITのキャッチアップを止めてはいけません。膨大な法改正を追うのと同時に、ITのトレンドも追い続ける。大変ではありますが、「IT×法律」の両面を語れることが、私の最大の差別化ポイントだと思っています。

TECO Designという「チーム」で働く理由

——個人事務所での活動に加え、TECO Designというチームでも活動されています。その理由は？

小林先生：個人事務所で活動していると、どうしても経験できる世界が限られてしまいます。TECO Designのような、最新のHRテックを駆使するチームに参加することで、携わらせていただくお客様のスケールも課題の深さも一気に広がりました。

仲間に恵まれ、最新システムの適用や経営労務監査などの「チームの仕事」と、個人事務所でじっくりと向き合う「障害年金」のようなパーソナルな仕事。この「リエゾン（連携）」が取れている今の環境には、本当に感謝しています。

障害年金相談室 | 小林勝哉社会保険労務士事務所

新宿区市ヶ谷の地で、障害年金の取得にご一緒に取り組みさせていただきます！
お電話でのご相談は03-6228-1336まで
sr-koba.com

「リーガル・プロフェッション」としての誇り

——最後に、小林先生が考える「社労士の核心」を教えてください。

小林先生：「リーガル・プロフェッション（法律専門職）」としての誇りを持つことです。かつて家庭裁判所の草創期に関わられた先生の孫弟子にあたる方から、大切なことを教わりました。「憲法や法律は、本来、一人ひとりを守るための温かなものである」と。

我々はその専門家として、困っている人のために這いつくばってでも手足となって動く存在であるべきです。誰かのしもべとなって尽くす。その覚悟こそがプロフェッショナリズムではないでしょうか。

——「誰かの記憶の片隅に残りたい」という言葉も印象的でした。

小林先生：「何かあった時に、そういえば小林がいたな」と思い出してもらえる。そんな信頼の積み重ねが、私の仕事のすべてです。一人の人間との関係を丁寧に、大切に。これからも、温かな法律のプロとして歩んでいきたいですね。

小林勝哉先生、ありがとうございました！

【次回のSRショッキングは？】 小林先生からご紹介いただいたのは、そのお人柄から温かなプロフェッショナルリズムが滲み出る、**前田先生**です！「一人のために尽くす生き方」を体現されている前田先生に、どんなお話が伺えるのか。次回もお楽しみに！

小林勝哉先生の活動・プロフィール

- 著書：『社労士45歳からの合格・開業のリアル』（中央経済社）



社労士45歳からの合格・開業のリアル

主な公職・活動：

- 厚生労働省「テレワーク相談センター」相談員・テレワークマネージャー
- 一般社団法人年金トータルサポート・コスモ 正会員
- 東京都社会保険労務士会 IT・デジタル特別委員会 元委員

専門分野：ITセキュリティ、テレワーク導入コンサルティング、障害年金相談



読んでいただきありがとうございます！お気軽に感想をお聞かせください♪